

ある。(藤枝 晃)

附記 本書巻頭「収録雜誌論集目」の支那の部に「學風」四卷一十二期(二十五年)五卷合訂本安徽省立圖書館刊が脱落してゐます、編者からの申出により一言附記しておきます。

## 拓拔魏の言語

Booberg, P. A., The Language of the To-Pa Wei.  
Harvard Journal of Asiatic studies 1936, Vol. 1. No. 2

従來、拓跋魏即ち北魏の言語を直接研究の對象としたのは、獨り我が白鳥倉吉博士が、一九〇二年 *Über die Sprache des Hing-nu Stammes und der Tung-hu Stamme* と題して Euliehn (Ivestia) de l'Academie Imperiales Sciences 1900. 7. 1. 1. 3. 東胡民族考第六・七回(史學雜誌第二二編)に之を訂正増補して三十有餘語に及べたのみでその他には纔かに Paul Pelliot 氏が *Journal Asiatique* 及び *Toung Pao* の所々に部分的に論じてゐるに過ぎない。

本論文は廣く晋書・宋書・南齊書・魏書・北齊書・周書・北史等の支那史書中より拓跋語約三十二語、外に推寅・拓跋の二語を加へて三十四を抽出してゐる。そ

の大半は嘗て白鳥博士に依つて採擇されたものと同語ではあるが、然し各語の解義に當つては全てをトルコ語或は蒙古語で解かんとする點に於て多くの異同對立を示してゐる。例へば、

①直眞(南齊書卷五七、呼内左右爲直眞。) ②烏矮眞(同上書同卷、外左右爲烏矮眞。) の直及び烏矮を白鳥博士は滿洲語・女眞語 Gold 語・Orcon 語等の通古斯語系で解かんとするに對し、烏矮はトルコ語 *ug* (Geschlecht) 或はトルコ・蒙古語の *Eng* (母方及び妻方の親族) と語源を同じくするものと考へ、従つて直眞及び烏矮眞の支那譯なる内左右・外左右の内外は單なる場所的用語にあらすして、男系親族・女系親族を示すものであると論じ、更に魏書(卷一三)官氏志に、

建國二年。初置左右近侍之職。無常員。或至百數。侍直禁中。傳宣詔命。皆取諸部大人及豪族良家子弟。……其諸方雜人來附者。總謂之烏丸。各以多少。稱酋庶長。分爲南北部。

とみえる烏丸の長をこの烏矮眞に比定せんとす。

③胡洛眞(南齊書卷五七、帶仗人爲胡洛眞。) 著者

は之を *yuraj*  $\wedge$  *X iraq*  $\wedge$  *Q iraq* の音譯とし、トルコ語 *qu* (*neircle, gisd*) に發源するものと見做し、匈奴の郭洛・廓落・鉤絡に關係付けてゐる。

⑬ 折潰眞 南齊書卷五七に、爲主出受辭人。爲折潰眞。とある受辭の辭を裁判に關する辯辭又は告訴と解し、之をトルコ語蒙古語の *jilyaxi* (administrator) 更には *Jaryaxi* (代官・執達吏) *Jaryaxi* (裁判官) に近きものと見る。

⑭ 阿眞 南齊書卷五七に、之を解して、飲食厨曰阿眞。貴人作食人爲附眞。と謂ふ。白鳥博士は阿眞を附眞(厨官或は膳夫)の誤寫とされてゐるが、著者は之に贅せずして阿眞をトルコ語 *axin*  $\wedge$  *as* (food) + *xin*  $\parallel$  *Cook* に比定してゐる。

その他、⑦庫仁眞(宋書卷九五)をトルコ・蒙古語 *qoyin*  $\wedge$  *qonin* (牧羊者) に、⑩直勤(或は勲、宋書卷九五)を古代トルコ語 *igin, tagin*  $\wedge$  蒙古古語 *igin* (prince) に、⑮曷刺眞(南齊書卷五七)をトルコ語 *axikin* (馬に乗るもの、騎兵) に、⑯多白眞(南齊書卷五七)をトルコ・蒙古語 *babagjin* (徒歩のもの、歩兵) とし、⑰索度眞(宋書卷二五)をトルコ語 *saqdaqjin* 或は

*saqdujin* (guardsman) ⑱直勲駕頭拔羽直(宋書卷九五)をトルコ語 *tasin* (直勲) + *at* (駕頭)  $\parallel$  *name* + *bagin* 拔羽  $\parallel$  *omen* + *tas* (直)  $\parallel$  *like, as* に、⑲烏雷直勤(宋書卷九五南齊書卷五七)をトルコ語 *uri* (烏雷)  $\parallel$  息子、男孫、*tagin* (直勤)  $\parallel$  *prince*、⑳拓跋去介の去介をトルコ・蒙古語 *tok, köke* (blue)  $\wedge$   $\wedge$  の *kök* には蒙古古語 *kalkin* (老人) の如く *old* 或は *old man* の意も含まるれば去介は後に、艾と改められたことと吻合すと、㉑侯豆陵・紇突隣(魏書卷一一三)をトルコ語 *qudu* (father in law) に、從つて匈奴の骨都侯も或はこの *qudu* の音譯であらうと。㉒郁都甄・郁豆眷(宋書卷二三南齊書卷二五)をトルコ語 *üg* (to pray) の音譯としてゐる。

以上そこには或は⑳や㉑の如く牽強附會に過ぎる點も多多看取しうるが、先人未發の新見解も亦決して尠なしとしなす。

著者は更に進んで拓跋の語義を極めんとし、魏書卷首に立ち還つてその冒頭に見える魏の先世の中、始均・推寅・隣及びその子詰汾を採り擧げ、特に獻皇帝隣の條に、

[獻]帝時年衰。乃以位授子。聖武皇帝諱詰汾。

帝命南移。山谷高深。九難八阻。於是欲止。有神獸。其形似馬。其聲類牛。先行導引。歷年乃出。始居匈奴之故地。其遷徙策略。多出宣・獻二帝。故人並號曰推寅。蓋俗云鑽研之義。

とある記事に留意し、之を突厥・キルギズ・蒙古等の開國先世傳説と比較して、これは從來山谷の間に居て外界とは纒かに狭間によつて通じてゐた metal work or 部族——之等の部族は多くその始源を狼か牡牛かに關係せしめてゐるが——が人口の増殖によつて彼等の隠れ場所より山を通り抜け道を鑽り開いて出て來たことを謂つたものに外ならないとの推測の下に、拓跋 (T'o.Pa)  $\wedge$  Tabyar (著者は拓跋 tak-b'at と西方名の Tabyar は結局同一名にして唯 b と r の字位轉換によるものとする P. Pelliot 氏の説に従ふ) は蒙古語 dabā, dabya— (to cross mountains, to make ones way through a defile) と同一系統のトルコ語形より出でたものにして従つて、拓跋魏の名義は Transmontani, Ultramontani と解するべきである。元來拓跋及び Tabyak の名義或は語義に關しては Deguignes, Richthofen を始め Hirth, 我が白鳥・桑原兩

博士・P. Pelliot 氏等の東西諸大家により、或は Tabyak  $\sim$  Taryas 即ち拓跋説或は唐家又は唐家子説等が主張せられてゐて、現在に至るもその定まる所をみないのであるが、本論は前述の如く廣く支那側史書を涉獵し、その中より拓跋語と目せらるべきものを抽出し來り、之を専らトルコ・蒙古語より解し、並に魏書にみえる拓跋族の遷徙開國説話より、ヒントをえて拓跋 (T'o.Pa)  $\vee$  Tabyak をトルコ語系蒙古語で解釋せんと試みたものでその論旨には一見 boldness な所はあるが衆説とは異つて新たな道を開拓し、幾多の示唆を與へるものと謂ふべきであらう。(田村實造)